様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月　 ３ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2009～2013
課題番号：２１５２０４６８

研究課題名（和文）平安・鎌倉時代の真言・陀羅尼資料に見える連音変化現象の研究

研究課題名（英文）Study of the Renjo Phenomenons that Appears in the Mantra and Dharani Materials of the Heian and Kamakura Periods

研究代表者
肥爪　周二（Hizume, Shuji）

東京大学・人文社会系研究科・准教授

研究者番号：７０２５５０３２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,300,000円、（間接経費）　990,000円

研究成果の概要（和文）：二つの音節が連続することによって生じる連音変化現象は、日本語の歴史においても、分節音・超分節音の双方にわたって指摘できる。しかし、文献資料の制約により、平安・鎌倉時代の実態については、ほとんど一次的な手掛かりが残存していない。そこで、平安・鎌倉時代の資料が豊富に残存する、真言・陀羅尼の訓点資料を調査し、和語的変化・字音語的変化・梵語音独自の変化を峻別することにより、和語・字音語の連音変化現象のデータを補完すべく、加点資料の収集・整理を行い、また、伝統的な悉曇学における連声学説との対照を行った。

研究成果の概要（英文）：In this study, I investigated materials of the Heian and Kamakura periods remains in abundance, the diacritical materials of Mantra and Dharani. Distinguishing the sound changes between the native Japanese words and the Sino-Japanese words and the Bongo words, I performed the collection and organization of diacritical materials, in order to complement the lack of data of the sound changes of the native Japanese words. Also, I compared these data with the sandhi theory in traditional Siddham studies.

研究分野：言語学

科研費の分科・細目：日本語学

キーワード：悉曇学　連声　撥音　促音

１．研究開始当初の背景

和語・漢語において、複数の単位が結合することにより、何らかの音変化が生じることがあるのは、夙に知られたことである。連濁・連声・母音脱落・声調変化等々、これまでも多くの研究が積み重ねられてきた。しかし、平安・鎌倉時代という時期に限ると、これらの事象を解明するための資料は、一般に思われているほど豊富に存在するわけではない。当該時期には、清濁やアクセントが判明する資料というもの自体が、大量に残存する日本語史資料の中では、ごく一部の少数の文献に限られているし、連声現象は、文字化された形で文献資料に現れること自体が稀である。そのため、平安・鎌倉時代の一次資料を用いた、和語・漢語の連音変化現象の研究、特に和語の研究は、データ面での限界に突き当たることになる。

一方、天台宗・真言宗などで用いられる真言・陀羅尼（本研究では、梵語を漢字で音写したものを中心的に取り扱う）に関しては、平安・鎌倉時代の一次資料が豊富に残されており、真言・陀羅尼の漢字文字列に仮名・ヲコト点および声点によって、その読み方が示されているものも多い。しかし、これを和語の資料として利用することはできないし、漢字音の資料としても、その読みに特殊なものが多いため、字音資料からは積極的に排除するのが通例である。これらは、日本語史研究においては「役に立たない」資料であり続けてきた。

２．研究の目的

日本語史の資料としては「役に立たない」真言・陀羅尼資料ではあるが、その読み方には、和語に通じる面と、字音語に通じる面、音訳語独自の面が共存している。これらのデータを的確に収集・整理することにより、平安・鎌倉時代の一次資料に恵まれない、連音変化現象を解明する手掛かりを得ることを目指す。

研究代表者は、近年（本研究開始前）執筆した論考において、分節音を中心的に取り扱ってきており、中でも、清濁・拗音・撥音に関して、いくつかの新見を提出している。その過程において、連濁の問題や、撥音・促音と後続音節の頭子音との関係などにも言及することはあったが、基本的には、音節内部の問題を中心的課題としてきた。本研究においては、音節と音節の隣接・結合によって生じる音変化を扱うことを意図しており、研究代表者の近年の研究を、新たな方向に展開することを目標とする。

３．研究の方法

（１）儀軌資料等に見られる、真言・陀羅尼加点資料の調査。

①京都東寺金剛蔵をはじめとする近畿地方の社寺における調査、②国立国会図書館・大東急記念文庫等、国内の諸文庫・図書館における調査、③東京大学所蔵資料の調査、④影印本・活字翻刻資料による調査を計画する。

（２）真言・陀羅尼の文字列と、対応する梵文との同定のための基礎的研究。

（３）真言・陀羅尼加点資料の整理・分析。

（１）（２）の成果により、平安・鎌倉時代の文献資料に見られる、真言・陀羅尼へ加点された連音変化の実例を、和語の連音変化に通じるもの、漢語の連音変化に通じるもの、真言・陀羅尼の連音変化に固有のもの、という観点から分析・整理する。

（４）古代・中世の悉曇学書に見られる連声学説との比較。

馬渕和夫氏らによる先行研究、および研究代表者の過去の研究などを踏まえ、悉曇学書に見られる理論的「連声」分析と、（１）～（３）により得られた、実践的な文献に見られる形との、比較・分析を行う。

４．研究成果

（1）真言・陀羅尼において、読みの特殊性を生み出す原因は多様であるが、その原因の一つに、複数の音の結合によって「読み癖」的音変化が頻繁に生じ、その音変化が、一般の字音語における音変化とは異質であることが多いため、漢字文字列から期待される字音と、実際の読誦音との乖離が大きくなるということが考えられる。例えば、東寺観智院金剛蔵本『胎蔵念誦次第』（第二七八箱一一号）保安五年（一一二四）点には、「怛麼（二合）〈マン〉南」「夜〈ヤム〉弭（濁）」「囉〈ラン〉儚（濁）〈タ〉」「荼〈タン〉多」「戍〈シユン〉駄（濁）」のように鼻音（撥音）が挿入される例、「瑟〈シユン〉拏（濁）〈タ〉」「末〈マン〉駄（濁）那〈ナウ〉」のように入声韻尾が鼻音に交替する例、「輸〈シユチ〉睇〈テイ〉」のように入声韻尾が挿入される例などが見出され、原梵文からも説明が困難な場合がある。

この種の現象は、程度の差こそあれ、多くの真言・陀羅尼の加点資料に共通して見られるものである。しかしながら、そのバリエーションの出現には極端な偏りがあり、また、資料によってバリエーションのちらばりに大きな差がある。つまり、特定の文字列に限定して、一種の読み癖としての特殊な読みが見られる資料を一方の極とし、もう一方の極は、バリエーションが相対的に豊富ではあっても、その出現が予測しがたく、そこに一定のルールを読み取るのが難しい資料がある。結果的に現れるバリエーションは、おおむね伝統的な悉曇学の連声学説の枠組みを出ないものである。しかし、この連声学説自体が、梵語の連音変化現象であるサンディとは無関係に、梵字文字列と音訳漢字のずれを説明するために発達したという面が強いため、ある意味、当然の結果であった。

（2）本研究期間中に調査した主要な資料としては、以下のようなものがある。各資料に見られる特徴とともに報告する。

○東寺観智院蔵大日経疏、巻第四～十、七帖（第一八九箱四号）、○同蔵大日経疏、巻一～三、五～七、六帖（第一八九箱五号）。『大日経疏』巻第五には、梵語の韻文であるガーター（伽陀・偈）を漢字音訳したものが三種掲載されている。右の二書には、このガーターに仮名点および声調を表す声点が差されており、梵語の韻律との関係が注意される。特に、第五号の院政期の訓点（ヲコト点は宝幢院点）は、朱筆の加点が詳細であり、この問題を取り扱う上で有益なものである。今、試みに、高山寺蔵『大日経疏』永保六年点（ヲコト点は東大寺三論宗点）と、第一のガーターの声点を比較すると、以下のようである。

△阿你(二合)也庾渋磨(二合)鼻囉睹邏
／羅婆（引）薦馱摩訶(引)怛麼(二合)鼻
高）　上上　平○平平　上上平○　上平
入平平○　上上　上
東五）去上　上上平上　上上上上　上上
入上平平　上上　上

△曳曩薩婆爾奈喩延
／娑補怛口頼(二合)口履訶赦娑泥
平平上上上上上平　上上平平　上平
上平平
去上上上平上上上　上上平上　入上
上上上

△薩囉梅(二合)跛口履蟻哩(二合)係哆
(引)薩他(二合)／闍耶磨嚢麼扈捺耶(引)
上上上　上○平平　去上　上平
上上上上上去○○
上上上　上上平上　去上　上上
上上上上上平上上

△帝曩喩延摩訶(引)夜泥(引)
／湿附(二合)若哆醯婆尾屣也(二合)他
○上上平平上　○平　平平　上平平
平上平平　平
去上上上平上　上上　入上　上上上
去上上上　上

韻文としては一行八音節、八行から成るものであるが、国訳大蔵経等に掲載される復元梵文では、韻律に乱れた部分があるようで、本来のガーターは俗語を含むものであったかもしれず、原文の具体的な韻律は未考である。高山寺本と第五号本との声点は食い違う部分が多く、概して、第五号本の方が、韻文らしい整った声調パターンを取る。具体的には、第一・三・七句が去声で始まる点、特に第三句と第七句は「去上上上平上上上」の型で一致している点などである。第二・第三のガーターを含めて、諸本の差声との比較が今後の課題である。

○東寺観智院蔵金剛頂蓮華部心念誦儀軌、一帖（第二九箱二四号）。天喜二年写、朱筆で仮名点およびヲコト点（宝幢院点）、墨筆で仮名点。真言に詳細な仮名点・声点の加点がある。薬・飲料としての「茶」の「チャ」という字音は、日本漢字音の体系から外れる慣用音であるとされるが、これとは別に、梵語音訳字としての「荼（しばしば茶と通用）」には、「ダ（タ）」の他に「ヂャ（チャ）」と読む伝承がある。本書では、一つの真言内部において、「荼〈雉也反〉〈チヤ〉」「荼〈去〉〈太（朱）〉」と、反切の有無により二様に読んでいる例があり、注意される。

○東寺観智院蔵金剛頂蓮華部心念誦儀軌、一巻（第二六箱三二号）、○同蔵金剛頂蓮華部心念誦儀軌、一帖（第二九箱二四号）。両書の真言部分の加点の調査を行った。前者には、平安中期の四次にわたる加点があるが、いずれも真言に対する加点を有していた。後者は天喜三年（一〇五五）の加点で、「跋〈ハム〉捺〈太〉囉」「孽〈ケム〉婆」のように、濁音の前のｔ入声を「ム」で表記した例が見いだされた。

○東寺観智院蔵金剛童子菩薩成就儀軌、巻上・中・下、三帖（第二十九箱十九号）。鎌倉時代建仁二年写、鎌倉時代加点（西墓点）。仮名による字音の加点が豊富であり、日本漢字音の資料として有益である。ただし、陀羅尼・音訳語以外の部分にも、呉音系字音と漢音系字音が混在する。〔濁声点の形状〕濁声点の形状は、巻により小差があり、巻上・二種、巻中・三種、巻下・一種が指摘される。〔「茶」の字音〕音訳語であるが、阿（去）里（上）茶〈チヤ〉（上濁）の例がある。

○東寺観智院蔵大毘盧遮那経広大成就儀軌、巻上・下、二帖（第二十九箱二十五号）。南北朝時代康永四年（一三四五）写本。奥書には、長元九年（一〇四〇）・長暦元年（一〇三七）・長久四年（一〇四三）・寛徳二年（一〇四五）の年号が見えており、仮名字体およびその誤写の状況から判断して、平安後期の点本を、南北朝時代に移点したものと推定される。〔濁声点の形状〕二種あるが、使い分けの基準は未考。〔仮名への差声〕多くは陀羅尼部分であるが、仮名に声点が差された例が散見する。「三〈サム〉髯〈セム（平濁平）〉」「僧〈シイ〉呬〈キ（上濁）〉曩〈ノ〉」など。通常の字音への差声は一箇所のみ。「蘂〈ヌイ〉〈スイ（平上）音〉〈スイ（平平）音〉」〔ng 韻尾の符号〕　党〈タ●〉（朱）〈タ●〉（墨）・蝋〈ラ●〉（朱）・臘（ラ●）（朱）〈ラム〉（墨）のごとく、他に例の指摘できない形状の符号が用いられている。移点の際に「◎」が誤写されたものか。

○東寺観智院蔵最勝立印聖無動尊大威怒王念誦儀軌、一巻、万寿二年写（第一四二箱第二一号）。当資料の和語の音便形は以下の通り。①m音便〔ンム表記〕＊践〈フン〉ムテ（ママ）（237）〔零表記〕喉〈ノト〉（101・169）上〈カ（平）ヘ〉？（144）。②量的撥音便〔零表記〕成就〈ナリナヌ〉（40）〔ン表記〕云何〈イカンソ〉（10）成〈ナ〉ンヌ他、③促音便〔零表記〕走〈ハシ〉テ（８）投〈イタ〉テ（８）他、〔ン表記〕了〈サト〉ンタマヘリ（12）蒙〈カウフ〉ンて（17）他）（補読）モンテ（35）モン（て）（36）他。

④ハ行四段動詞音便形〔ム表記〕遇〈ア〉ムテ（７）得〈エ〉タマムタリ（18）対〈ムカ〉ムて（261・292・298）問〈ト〉ムテ（302）〔ン表記〕言〈イ〉ンハ（253）〔零表記〕纏〈マツ〉テ（６）。ハ行四段動詞の音便形のム表記を、Φ音便（または、その痕跡）の表記と見なした場合、当資料の音便形の表記は、m音便・Φ音便をム表記、量的撥音便・促音便をン表記する整然としたシステムを基盤にしていると推定できる。議論の多いハ行四段動詞音便形の問題を解決するために、最重要の資料であると言える。

○東寺観智院蔵大毘盧遮那経疏巻第二、一帖、延久二年点（第一八九箱第三号）。①m音便〔ム表記〕喜〈コノ〉ムて（二三オ）好〈コノ〉ムて（二三ウ）潭〈アム〉ス？（四三ウ）。②量的撥音便〔零表記〕軽忽〈イルカセ〉シテ（一八ウ）。③促音便〔零表記〕以〈モ〉テ（二二オ）阻〈ハヽカ〉テ（三一オ）破〈ワ〉テ（四〇ウ）渉〈ワタ〉テ（四五オ・五六ウ）猶〈ヨ〉テ（五五ウ）〔ン表記〕猶〈ヨ〉ンテ（三九ウ）〔ム表記〕尚〈タムト〉フ（二九オ）。④ハ行四段動詞音便形〔ム表記〕曲を度（右）〈ツタ〉ヱテ（左）〈ナラ〉ムテ（二八ウ）。同様にm音便・Φ音便にム表記を用いる資料と推定できる。特徴的なのは、「タフトブ」の音便形「尚〈タムト〉フ（二九オ）」、漢字音のｐ入声の「蟄〈チム音〉（三六オ）」のように、ム表記がΦ音便の表記であった傍証となりうる例が見えるところである。

○東寺観智院蔵金剛界儀軌上、一帖、天永二年点（第一三一箱第一四号）。②量的撥音便〔零表記〕无くナヌ（一六オ）為〈ナ〉ヌト（一六オ）如くナヌ（一九ウ）。③促音便〔零表記〕威〈ヰ〉アテ（一二ウ）（補読）をモテ（五オ以下多数）。④ハ行四段動詞音便形〔ム表記〕救〈スク〉ム下へと（五ウ）。この他、バ行・マ行の交替例として、次のものがあった。　燈〈トモシミ〉の（五ウ）、普〈アハネ〉く（一〇ウ）。

○東寺観智院蔵摩多体文清濁記、一帖（第二〇二箱四号）。奥書等の一切を欠いているが、室町時代の写本と推定される。内容としては、中世の東寺悉曇学の精華である『悉曇字記創学鈔』の後半部分（賢宝補筆）の、『悉曇字記』の音注漢字の一つ一つを、「声調・韻目・韻鏡五音・韻鏡清濁・広韻反切・玉篇反切」の形で示した部分を、抜き書きしたような体裁のものである（以下に例示する）。以前の調査では、『清濁記』が『創学鈔』を抄出したものであるのか、『創学鈔』編纂の素材として準備されたものであるのか、明らかにすることができなかった。全項目を照合した結果、共通する項目一五〇、『創学鈔』独自項目八、『清濁記』独自項目一九、共通する項目のうち、内容に差があるもの三二、『創学鈔』の方が情報が多いもの五、『清濁記』の方が情報が多いもの二五（うち『玉篇』の反切一五）、両者で出入りがあるもの二であった。『清濁記』は『創学鈔』の単純な抄出ではあり得ず、おそらく『清濁記』（または、その元となった文献）は、賢宝による『創学鈔』補筆の過程において、音訳漢字分析に特化した目的で編まれたもので、賢宝は、そこから取捨選択して『創学鈔』に情報を取り入れる一方で、独自に『韻鏡』『広韻』を利用して、必要な情報を補充していったとものと推定される。

○奈良国立博物館蔵悉曇蔵。新出資料である奈良国立博物館蔵『悉曇蔵』の朱点について、巻第八冒頭の麽多（母音類）を一覧にした箇所に併記された二系統の伝承が、「四家悉曇記」にも記載される難陁・空海の二系統の発音に相当すること、声点に関しては、続く体文（子音類）を一覧にしたものを含めて、難陁の声調を採用したものであることを確認した。その一方で、さらに続く悉曇章部分の声点は、空海の麽多の声調に依拠した加点がなされていることを見いだした。この『悉

曇蔵』写本の巻第一は、奥書によると、明覚の加点本を移点したものであり、巻第八も同筆の移点本である、つまり明覚の梵字の読みを伝えたものであるとの推定もあるが、加点されている梵字の読み方は、明覚自身のものとしては、いくつかの点で不審があることも判明した。

（３）本研究における成果として、特筆すべきものに「Φ音便」の再評価がある。Φ音便は、築島裕氏によって提唱されて以来、証拠が不十分であったためもあって、長らく埋没していた学説であったが、上記の東寺観智院蔵『不動儀軌』万寿二年写本において、ハ行四段動詞・補助動詞の音便形が仮名「ム」により表記されている例が、撥音便とも、通常の促音便とも解しがたいことを指摘し、音価無指定の量的撥音便・促音便が符号「ン」を表記に共有するのと対応して、m音便とΦ音便とが、唇音に固定した撥音・促音として、仮名「ム」を表記に共有している可能性を指摘した点が、大きな成果であった。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１０件）

①肥爪周二、「拗音をめぐる二つの物語」、『日本語の研究』、査読無、第一〇巻二号、2014、pp.90-91

②肥爪周二、「Φ音便について」、『訓点語と訓点資料』、査読有、第一三二輯、2014、pp.16～35

③肥爪周二、「書評　高山倫明著『日本語音韻史の研究』」、『国語と国文学』、査読無、第九一巻二号、2014、pp.75～79

④沼本克明・肥爪周二、「奈良国立博物館蔵『悉曇蔵』について」、『訓点語と訓点資料』、査読有、第一三〇輯、2013、pp.1～18

⑤肥爪周二、「書評　小倉肇著『日本語音韻史論考』」、『國學院雑誌』、査読無、第一一三巻七号、2012、pp.53～57

⑥肥爪周二、「日本悉曇学と『韻鏡』」、釘貫亨・宮地朝子編『ことばに向かう日本の学知』（ひつじ書房）、査読無、2011、pp.193～211

⑦肥爪周二、「日本漢字音における拗音・韻尾の共起制限」、『訓点語と訓点資料』、査読有、第一二七輯、2011、pp.200～209

⑧肥爪周二、「音韻（史的研究）」、『日本語の研究』、査読無、第六巻三号、2010、pp.51～58

⑨肥爪周二、「書評　佐々木勇著『平安鎌倉時代における日本漢音の研究』」、『国語と国文学』、査読無、第八七巻九号、2010、pp69～73

⑩肥爪周二、「古典語の連濁―二つの未解決問題―」、『古典語研究の焦点』（武蔵野書院）、査読無、2010、pp.181～202

〔学会発表〕（計３件）

①肥爪周二、シンポジウム「拗音をめぐる二つの物語」、日本語学会、静岡大学（静岡）、2013.10.26

②肥爪周二、「Φ音便について」、訓点語学会、東京大学（東京）、2013.10.20

③肥爪周二、「悉曇学と『韻鏡』」、名古屋大学グローバル COE プログラム第９回国際研究集会、名古屋大学（愛知）、2010.9.11

〔図書〕（計２件）

①木田章義・肥爪周二他計８名、世界思想社、「資料論」（木田章義編『国語史を学ぶ人のために』）、2013、pp.3～29）

②沖森卓也・肥爪周二他計４名、朝倉書店、『日本語史概説』、2010、pp.9～28、109～115、142～147、154～155

６．研究組織
(1)研究代表者

肥爪　周二（Shuji　Hizume）
東京大学・大学院人文社会系研究科・准教授
研究者番号：70255032